

フランスにおける精神分析の現状

——フランス文化におけるジャック・ラカンの占める位置——

J=D・ナシオ

訳：番場 寛¹

第一部

私はまず皆さんにこの街、京都にすることを大変嬉しく、そして名誉に思っているということを述べたいと思います。私は、私をお招きくださったことに對し、番場さんと大谷大学に感謝したいと思います。私はまた、今はいらっしゃいませんが、このセミナーの終わり頃いらっしゃることになっている新宮(一成)先生にも感謝したいと思います。私はまた、東京の青山学院大学の石崎(晴己)先生の名前もお知らせしておきたいと思います。私がここで皆さんの前にいることができるのは、彼のおかげです。でも私の仕事と日本に来たいという望みを彼に知らせてくれて、私を日本に招いてくださる仲介役をつとめてくれたのは番場さんだ²というわけです。

私には、語り、意見を交換し、また教え、教わらなければならないことがたくさんあります。私が強く望むことは私が日本を出発し、パリに帰ったとき、まじめな意味で、私が変わっていることです。それぞれの旅行が私を変えます。私たちにはわずかな時間しかありませんので、私は短い説明をしたいと思います。その後皆さんの方から質問してくださると嬉しく思います。このセミナーは教師然としたセミナーではなく、生き生きとした意見の交換が行われる活発なセミナーになってほしいと思います。それは東京や仙台で行われたことであり、この京都でもそのように進むことを期待しています。

私は12月14日に日本に着きました。つまり10日程滞在しているわけですが、私は皆さんに私が受けた二つの印象をお話したいと思います。最初の印象は若い人たちが非常に多く目につくということです。街には非常に多くの若者がいます。私は特に東京や仙台の通りを歩いたわけですが、若者の顔ばかりが目につきました。なぜだか分かりません。おそらく年輩の方も多くおられるには違いありませんが、私には若者だけが目につきました。もし人から印象を尋ねら

れたら私はそう答えるでしょう。それは私が学生街にいたせいではありません。私はいろいろな界限に行きましたが、どこでもとても若い人たちの顔を多く見ました。私が若いというのは18歳、20歳、30歳、40歳の年代の人たちのことで、多くの人のなかに、年配の方はあまり見ませんでした。もう一つの印象は、私が東京にいたときのことです。日本に来たのは初めてなのですが、私は精神科医、学生、教師の方々と言葉を交わしましたが、それはフランス文学の先生であり、心理学の先生でした。私の受けた第二の印象は、知への渴望、つまり知りたいということへの渴望です。

すでに番場さんが私を紹介してくださいましたが、私は自分のやり方で自己紹介をさせていただきたいと思います。私が言いたいのは、ただ私がパリで何をしているかということであり、わたしのパリでの活動についてです。パリで私は一番多くの時間を臨床にささげております。私は多くの患者に会っています。私は子どもと大人を診ております。子どもといっても、とても幼い12歳、10歳の子であり、大人は神経症の人であり、時にはアルコール中毒の患者であり、ごくまれですが、精神病の患者もいます。私はそれらの患者をかかえてとても忙しいのですが、私はその活動がとても好きです。その仕事は私の喜びであり、精神分析という仕事に私は夢中になっています。少なくとも精神分析家という仕事は私を熱中させる仕事なのです。他の重要な活動は書くという活動です。私はたくさん書きます。私は書くことが好きです。書くことは難しいです。たやすくはありません。書くときは大変苦しまねばなりませんし、同時に熱意を持って書かねばなりません。しかし私は書くことが好きです。それは私が頻繁に行っている活動です。それが私の二番目の活動です。三番目の私の活動は、教えるということです。私は多く教えております。私は大学で教えています。私は今ここでやっているような活動を毎週大学で行っております。ここには学生さんは何人かしはおられないと思いますが、私は毎週学生を前にして授業を行っています。私は週一回パリ第7大学で精神分析を教えております。そしてまた私は今すでに必要な過程を終了した分析家のためにも一種の分析を教えております。それはすでに長い精神分析の経験をつんだ分析家と一緒に行っています。

さて、番場さんは私にジャック・ラカンの理論をここで簡単に説明してくれるように私に頼みました。皆さんご存知のようにジャック・ラカンの理論を短

く説明するのはとても難しいことです。このなかにはジャック・ラカンの理論を良く知っていられしゃる方も、またそれを知っていられしゃらない方も数多くおられるということを私は知っております。それゆえ、私はまず最初にそれらを知らない方に向かってお話します。したがってそれらを知っていられしゃる方にはあらかじめお詫びをしておきます。それで私は次のように進めて参りたいと思います。まず最初にラカンの理論を、それを知らない方に対し手短かに説明します。次に皆さんと意見を交換することにより、より専門的な説明へとお話を進めて参りたいと思います。

ジャック・ラカンは皆さんご存知のように、フランスの精神科医です。この精神科医だということはジャック・ラカンにとってとても重要なことです。彼は1901年に生まれました。そして1981年に亡くなりました。それで彼は80年生きたわけです。彼の仕事は創造的な精神分析です。重要なことは、彼は1953年にセミナーを始めて1980年にそれを終えたということです。それで彼は27のセミナーを行いました。それゆえ彼は27年間公衆を前にして話したわけです。ジャック・ラカンは、1932年発行の学位論文を除いては、一冊にまとまった本を書きませんでした。彼は短い論文や長い論文を書きましたが、彼の仕事はとりわけ口頭によるもの、丁度今晚と同じように口頭によるものなのです。もし口頭での仕事を取り上げるとするなら、それはセミナーと呼ばれるものです。このセミナーと言う語はフランス語においては日本語における意味とは違った意味を持っています。ここではセミナーというと対話を指しますが、向こうでは聞いている人を前にして行われる講義を指します。つまりラカンは誰からも質問されることなく一時間半話すのです。最初に質問がある場合はありますが、普通は彼がずっと話すのです。

ジャック・ラカンのセミナーの三つの時期

彼のセミナーは三つの時期に分けられます。これは図式的に言っているのですが、最初の時期は「想像界 (l'imaginaire)」に捧げられました。そしてつぎの十年間は「象徴界 (le symbolique)」に、そして最後の十年間は「現実界 (le réel)」に捧げられました。これらの三つの概念、「想像界」「象徴界」「現実界」をラカンは三つの面 (plan)、三つの次元 (dimension) と呼びました。内的精神生活の三つの次元のことです。私は念を押しますが、皆さんはジャック・ラ

カンの著作や論文を、またはジャック・ラカンについての著作を読むことができます。この「想像界」「象徴界」「現実界」という語について恐らく皆さんは多くのフランス人と同じように誤ってお考えになるかもしれません。それらの次元を現実 (réalité) と考えてしまいがちです。これらの「想像界」「象徴界」「現実界」というのは外的現実ではなく内的現実の次元なのであるということをよく理解しなければなりません。これがとても重要な第一点です。つまり非常に厳密に言えば、「想像界」とは内的生活なのです。ところで「内的現実」は精神分析において一つの名前を持っており、フロイトによって始められ、ラカンに引き継がれましたが、「内的現実」とか「心的現実」とか言う代わりにそれに対応する「幻想 (fantasme)」という語が使われました。この「幻想」というのは「幽霊 (fantôme)」ではありません。またこの「幻想」といったものは、頭の中のイメージでもないのです。「幻想」とは私たちの無意識的な心的生活の現実のことです。「幻想」とはあるイメージでもなく、それは一つの「構造 (structure)」なのです。それは内的生活の構造なのです。「幻想」はこれらの「想像界」「象徴界」「現実界」という三つの次元によって構成されています。

もしラカンがここにいたとしたなら、彼はこう言うでしょう。「ナシオさん、三つの次元をどうしてそのように置くのですか？」と。彼でしたらこの三つの次元を「結び目 (noeud)」として提示するでしょう。この「想像界」「象徴界」「現実界」という三つの結び目は私たちの精神生活を構成しており、私たちはそれを「幻想」と呼びます。この概念はとても込み入っていますが、私は難しいことを分かり易くお話したいと思います。それをとても易しいところから厳密に説明して、できるだけ高い水準にまで皆さんを導こうと思います。ラカンはこのように提示したのですが、この難しい概念を私は違ったやりかたで、厳密に示そうと思います。私はもっと単純だが私たちがちゃんと理解するのを助けてくれる図式で示そうと思います。(人の顔の絵を描きながら)これは誰かの頭です。この誰かの頭にこのように「象徴界」「想像界」「現実界」が構成されています。なぜ私は「頭」と言ったのでしょうか？ それは私はラカンが言わなかった何か、強調しなかった何かを示したいからです。

この「想像界」「象徴界」「現実界」はただ一つの頭の中に存在するのではなく、二つの頭の中に存在するのです。皆さん今お分かりになったように「幻想」があるためには、二つの頭、二人の個人が必要なのです。つまり私の言いたい

のは「幻想」とはある一人の個人の内的精神生活の「範域 (instance)」にあるのではないということです。「幻想」というものは情的な関係にある二人の個人の間に構成されるのです。つまりそれが私たちの、息子や父や母や妻や夫であるかは重要ではありません。それが配偶者であるか、お気に入りの人であるかは重要ではありません。そうした人たちに対し私たちは自分のお気に入りの「幻想」を抱くのです。繰り返しますがここでの私たちのその関係する相手は誰でもいいと言うわけではなく、私たちがある情的な歴史、情的な関係を持つ「ある選ばれた人 (un élu)」なのです。それゆえ、「幻想」とは私たちに心的現実を与えているものの名なのです。「幻想」とは「想像界」「象徴界」「現実界」という三つの面で構成されています。この「幻想」は一人の個人の領域に構成されるのではなく、相互主観的な関係 (relation intersubjective) において構成されるのです。

「想像界」と「自我」

「幻想」とは何であり、「想像界」「象徴界」「現実界」とは何でありましょう？「想像界」とはその名の示す通り、イメージの総体であり、私の持っている他人に対してのイメージの総体 (l'ensemble des images)、私自身についてのイメージの総体、一般的な物事についてのイメージの総体のことです。それゆえ、それは私の中に書き記されたイメージの総体のことです。この他人についての、そして自分についての、そして物事についてのイメージの総体といったものは、複合体 (complexe) ではなく、鏡に写った像ではありません。それはイメージ全体ではありません。それは断片 (fragments)、数、色、光といった断片、物事の断片、なのです。この私の内部のイメージの総体といったものは、私を他者に結びつけているものです。なぜならそれは単に私の内部にあるというだけではなく、私を他者に結びつけているものだからです。それは丁度、お菓子のパイの積み重なった皮のようなものです。実はこのイメージのパイという喩えは私のアイデアです。ラカンが玉ねぎの喩えを用いる方を好みました。もろもろのイメージといったものは玉ねぎの皮の層のように積み重なっています。繰り返しますが、それらのイメージといったものは断片です。玉ねぎの皮のように積み重なったイメージの総体、それは「自我 (moi)」と呼ばれます。

しかしこう言われるかもしれません。「待ってくださいナシオさん。なぜ自我

だけなのですか？」と。なぜならラカンにとってはフロイトと違って、自我と言うのは「想像的な心的領域 (instance psychique imaginaire)」だからです。フロイトにとっては自我とは心的装置の一部でした。他には「超自我」と「エス」があります。ラカンにとっては「自我」といったものは私たちに関係している他人や自分自身の諸々のイメージの総体であります。私はこのイメージについて重要なことを述べましょう。それらのイメージが自我の一部をなすためには、それらのイメージは私に関係しているものであり、ある情動を備えている必要があります。例えば私はこのコップのイメージを持っていますが、このコップのイメージといったものは私の自我の一部であります。このコップのイメージが自我の一部をなすためには、私がこのコップを好きだと言わねばなりません。例えば、これはプラスチックでできているのですが、これがお茶の茶碗だと仮定してみましょう。そしてこれは私の父の物だとします。私これが手にしお茶を飲むと、これは私の父を思い出させます。その時この物は私にとってある意味、ある情的な価値を持つわけです。この物はイメージを作り、自我の一部をなすのです。これらの諸々のイメージ、イメージの総体といったものは、私が好きな、或いは私が憎んでる物や人のイメージなのであり、全ては私にとって情的な価値を持っているのです。

「象徴界」とシニフィアン

以上が「自我」についてです。今度は「象徴界」に移りましょう。おそらく皆さんはこうおっしゃるかもしれません。「ナシオさんあなたのおっしゃることはごもっともです。それを認めましょう。それは受け入れられます」と。私は少し抽象化した理論的な面に移りたいと思います。私が述べることは数学のような抽象化したものですが、私の願うことはこの抽象化は人間の現実、苦しむ人々に由来するものであり、そしてそれはその人間的現実、苦しむ人々に再び返されるべきものだということです。「象徴界」に参りましょう。そして次に「現実界」に参り、そして今度は皆さんに発言を求めるということにしたいと思います。どうぞ私にご質問ください。

「象徴界」といったものはその名から想像されるようなシンボルではありません。確かに1952年、53年に最初ラカンが「象徴界」という概念を得たときには、シンボルという観念はありました。しかしシンボルという概念は消え去り

ます。彼は「象徴界」という名称だけをとっておきました。「象徴界」はシニフィアンと呼ばれる要素によって構成されています。「象徴界」はシニフィアンの網の目を思い描く必要があります。シニフィアンとは何でしょうか？ それは厳密にし、ちゃんとした定義を与えるのはとても難しいものです。シニフィアンは物ではありません。シニフィアンとはある抽象的な名であります。私が皆さんに言ったような第一列、第二列、第三列というようないわば場 (place) のようなものです。ここでは私は教育者という場にいます。しかし二時間後にはここに別の教育者がいます。教育者というのは一つの場合なのです。シニフィアンというのは、一つの場であり、明確なある物ではありません。つまりこの場は最初の教育者、二番目の教育者、女性、男性、その他という風に多くの人がこの教育者の場に来ることができるのです。シニフィアンとは、異なった人や物が来ることができる場であります。

どのような物やどのような人物がシニフィアンの場に来ることができるのでしょうか？ 三つの条件を満たす物や人がシニフィアンの場に来ることができます。第一の条件は、それがどんなものであれ、それは人間的なものを表明するものだということです。第二はその人間的なものの表明は主体の知らないうちになされるということです。それは例えば今しがた、番場さんがカセット・レコーダーの電池を入れ忘れたように、一種の無意識のうちの間違い (lapsus) として現れます。私がそうしようとは考えてない動作、私の意識を逃れる何か、私の知識や意志の彼方にある何かを仮定しましょう。人間的なものの現れであり、それが意図や知識を逃れたものであるとしたなら、私は第三番目の条件として、他者と結び付けられているということを挙げたいと思います。これらの三つの条件を満たしたとき、それはシニフィアンであるということができます。むしろそれらはシニフィアンの場に来ることができるという方がいいかもしれません。これは抽象的な説明です。

私は皆さんにお願いしますが、「象徴界」の説明の後ご質問ください。その後「現実界」について説明したいと思います。今は「象徴界」についてですが、「象徴界」とは諸々のシニフィアンによって構成されている一つの構造であり、そのシニフィアンは二つの範疇に分けられます。ラカンにおいては、シニフィアン1と他のすべてのシニフィアンというふうに分けられます。私が今しがた述べましたが、シニフィアン1は主体の意図や知識を越えた人間的なものの現

れです。その例としては、無意識的な間違いや「症候 (symptôme)」が挙げられます。「症候」というのは例えば、橋を渡るのが怖いといったものです。それは「不安 (angoisse)」です。なぜならそれを私は制御できないからです。この主体の意図や知識を越えた人間的なものの現れは、常に他者との関係にあるということに注意してください。もし私がシニフィアン1とは何かと問えば、それは全ての人間的なものの現れがやってくる一つの場ということになります。では他のシニフィアンとは何なのでしょう？ それらは知覚もされなければ、触知することもできないものです。こちらのシニフィアン1の方は、私が見ることも聞くこともできるものです。一方、他の全てのシニフィアンというのは、知覚することも聞くこともできません。この他のシニフィアンというのは抽象化した構造であり、理論によって導かれたものです。

例を挙げましょう。例えば私が無意識的な間違いをしたとします。その後それは過ぎ去り、私の内的生活の中に書き記されます。私が夜、夢を見たとしても朝には忘れてしまいます。その時の夢はシニフィアン1だということができます。私が夢を見てそれを忘れるとき、それを忘れるや否やそれは忘れられたものの全体の中に落ちます。その忘れられたものの総体、それを私は「無意識」と呼びます。今晚私が夢を見て忘れたものは、その忘れられたものの総体の中に入ると言わねばなりません。しかし私がその夢を見ることができるのは夢の前に忘れられた他の全てのもののおかげなのです。これではっきりしたのでしょうか。二つの面(plan)、二つの線があります。これは私が忘れた線、私たちの生活において忘れられた物事です。そして現れたものです。これが夢であり、現れたものです。忘れられたものの総体の中から夢が現れ、再びその忘れられたものの総体の中に落ちていくのです。その夢がシニフィアン1であり、(別の部分を指して)そしてこれが他のシニフィアンの総体です。つまりシニフィアン1は現れ、シニフィアンの総体といったものは現れません。お分かりでしょうか？ シニフィアン1を S1 と書き、他のシニフィアンの総体を S2 と書きます。この二つ、これがラカンがシニフィアンの対 (paire des signifiants) と呼んだものです。したがって「象徴界」というのは、シニフィアン1と他のシニフィアンの総体 S2 によって構成された一つの次元、一つの構造だということになります。それは常に機能しています。常に私が外に見る一つのシニフィアンがあります。なぜなら私は常にここにいるからです。「無意識」と言うのは現れるシ

ニフィアンを生み出すもの(producteur)です。一つ明確にしておきたい語があります。「無意識」と言う語がありますが、「無意識」とは何でしょう？それは「象徴界」と同じ定義が与えられます。「象徴界」と「無意識」は同じ名称だと言うことができます。それは互いに結び付けられた要素の全体において機能するある構造なのです。そしてそのお互いに結び付けられた要素については、私は意識していないし、知りもしません。それは表面に、外部に一つのシニフィアンを送り出すものなのです。ちょうどそれは永久運動をする機械のようなものです。ここで少し休憩に入りましょう。そのあと「現実界」についてお話ししましょう。

第二部

ナシオ：もしよろしかったら、皆さんの方からご質問ください。

ラカンの理論的發展を三つの時期に分けることについて

枝川昌雄：どうしてシニフィアン1からシニフィアン2へと移行するのかという、移行の動機に関しては、私は抑圧(refoulement)といったことによって説明できるのではないかと思います、いかがでしょうか？

次にラカンにおいてどうして「想像界」から「象徴界」、「現実界」へとそれぞれの段階に移行していったのかと言う点についてお聞きしたいと思います。

ナシオ：ラカンの著作における1953年から1980年までの「想像界」「象徴界」「現実界」という三つの段階の移行の動機についてお尋ねですが、ラカンがこのようにしたのではないということは知られています。これは私の読みなのです。このことは良く説明されなければなりません。いつもシュールレアリスムの例を出すのですが、アンドレ・ブルトンのいた時代にはシュールレアリスムは存在しませんでした。シュールレアリスムとは呼ばれていませんでした。シュールレアリスムと言う語は歴史家によって呼ばれたものです。³恐らくブルトンは「超現実性」について定義はしていたでしょう。それもとても興味深いやり方で。彼がシュールリアリストだと言ったのは他の人です。ラカンは1953年までは自分のセミナーをしませんでした。私は今、「象徴界」と「現実界」について

説明していますが、これは私の懐古的な解釈であり、人々に説明するためにこの時期は「想像界」が優位であり、またこの時期は「象徴界」が優位な位置を占めており、またこの時期は「現実界」が重要な位置を占めていると言っているわけです。これがまず第一に重要な点です。

枝川昌雄：ラカンにおける各段階についてですが、彼は「主体」と「自我」を分けることによって「想像界」から「象徴界」への移行は、例えば「ローマ講演」において、「心的構造を説明するためには象徴界に移らなければならない」と言っています。しかし後に彼は「象徴界」のなかにある「穴 (trou)」を発見して「現実界」に移行したのだと私は思います。これらの移行においては常に理論的な原因、理論的動機があるように思えるのですが、いかがでしょうか？

ナシオ：はい。あなたのご質問は興味深く思われます。そしてそのおかげで私は自分が少し断言しすぎた、あるいはかなり一般的なことを放っておいたということを認めざるを得ません。ご説明しましょう。これらの区別と言ったものは、繰り返しますが、図式的なものです。なぜなら、その時代においてはラカンは「象徴界」と「現実界」について多く語りました。その時代彼は「想像界」と「現実界」についてたくさん語りました。またこの時代彼は「象徴界」と「想像界」についてたくさん語りました。私は言いたいのですが、これらは「主調となるもの (dominance)」だということです。今、枝川さんあなたの質問にお答えしますが、この時期においては「他者」、自分と似た「他者」との「想像的關係」が主調となっていたということです。(板書した第二期を指し示し) ここにおいてとても重要なものが現れています。それは「主体」概念です。とくに「無意識の主体」です。これはとても図式化された質問であります。もし私が「想像界」と設定するとしたなら、それはラカンがとりわけ他者との「想像的關係」についてたくさん語っているからです。そして第二期における「象徴界」の重要性は、彼が特にまさにここにおいて現れた「無意識の主体」の概念について定義しようと努力しているからです。この「無意識の主体」という概念は1960年-61年のセミナーで出てきています。

続けましょう。この時期においては、社会的な視点から見るとラカンはとても異なった状況にいます。(板書した第一期を指し示し)こちらにおいては彼は

「国際精神分析学会 (IPA)」にいましたし、(板書した第二期を指し示し)こちらの時期においては「国際精神分析学会」と決裂しておりました。つまりこの第一の時期においてはラカンは、精神分析家の公的な共同体の中にいたのですが、1963年には彼は分析家達の公的な共同体との関係を絶ちきり、より個人的な研究を始めました。私は繰り返しますが、このようにこれは今日1996年における懐古的な視点なのでして、ラカン自身にこういう風に分けられる時期があったわけではなく、彼は常に一步一步こうした問題を常に探究し続けたわけです。

私が今しがた第一部で述べたことは、ラカンを知っている仲間の皆さんはよくご存知ですが、高いレベルの理論的なことです。それでどうぞ素朴な(sim-ple) 質問をすることを遠慮なさらないでください。私は素朴な質問が好きです。

「対象 a」

女子学生：私はもっと素朴な質問をしたいと思います。

ナシオ：私はより素朴な質問が好きです。皆さんご存知のように、最も素朴な質問といったものは最も難しいものなのです。

質問者：自我の玉ねぎの中心には何があるのでしょうか？ あなたはご説明したように思いますが、それは「対象a (objet petit a)」なのでしょうか？

ナシオ：もうあなたは質問しましたが、それが既に答えになっております。

質問者：私は「対象 a」というものは「無 (rien)」だと思うのですが。

ナシオ：私の方から質問させていただきたいと思いますが、あなたは新宮（一成）先生の学生さんですか？

通訳：彼女は西川（直子）先生の学生です。

ナシオ：彼女の質問はいい質問です。答えるのは易しくはありません。実際、そちらのお嬢さんは私に、玉ねぎはイメージだと言わせました。イメージを表面(surface)のように想像しなければなりません。つまりそれぞれの線(ligne)がそれぞれのイメージなのです。そしてイメージといったものは部分的な(partielle)何かのイメージです。例を示しましょう。私の内的イメージの中に、他者との関連性があります。これらの内的イメージといったものは、私が感じるもの、無意識的なものであるが、意識することができるものです。例をあげましょう。見ることも聞くこともできないが、触れることのできるイメージを仮定しましょう。私は私の母が私にシーツを敷いてくれたときのことを私が覚えていると仮定しましょう。それは被われるという感覚です。これは意識の中に残っているイメージです。これは触覚的なイメージであり、注意してもらいたいのですが、視覚的なものではありません。異なったタイプのイメージがあるわけで、視覚的なイメージがあり、聴覚的なイメージがあり、触覚的なイメージがあり、イメージについて語るようなあらゆる感覚のイメージがあります。私はこれらの積み重なったたくさんのイメージで一杯になっています。

一つの例で説明しましょう。マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の中で、語り手がマドレーヌのお菓子を口にする場面があります。ブルーストと思われる語り手が、子供のころベッドで目覚めると叔母さんがお茶と一緒にマドレーヌのお菓子を朝食に運んでくれたのでした。彼はマドレーヌをお茶に浸して味わうのです。何年か後に、彼はマドレーヌを食べるときに自分の叔母さんを思い出すのです。このブルーストが40歳のときに、あるいは30歳のときにマドレーヌを食べたときに思い出した子供のころ食べたマドレーヌは、味覚的なイメージです。それゆえ私たちのイメージや私たちの玉ねぎや私たちの自我といったものは、味覚的、嗅覚的、触覚的、視覚的な複数のイメージによって成り立っています。すべてのイメージは情的な構成要素であります。そうです、「イメージはリビドーで一杯になっている」とフロイトは言いました。一方ラカンも、「イメージは対象aを覆っている」と言いました。対象aは玉ねぎの中心、自我の中心にあるのです。それゆえ、自我といったものは対象aを覆っているイメージの総体なのです。対象aは玉ねぎの芯のようなものです。ラカンにとっての対象aはフロイトにとってはリビドーです。フロイトは「リビド

ーは心的エネルギーである」と言っていました。「それは性的特徴 (sexualité) に結び付けられたエネルギーである」と。しかしフロイトは、「自分はあるがままのリビドーとは何であるか知らないと思い知らされた」と言っていました。「私は、物質 (matière) としてのリビドー、エネルギーとしてのリビドーが何であるか知らない」と言っていました。ラカンは同じことを少し異なったやり方で言っています。「私たちの自我とはイメージの総体である。しかし私たちのイメージは情動で一杯になっている」と彼は言っています。フロイトのように、イメージはリビドーで一杯であると言う代わりに、ここで私はこのことを説明しますが、プルーストがマドレーヌを食べるときに彼の叔母さんのことを思い出したように、プルーストの場合におけるリビドーは「郷愁」なのです。ラカンは少し異なった風に重点を移しました。ラカンは言いました。「われわれのイメージは、われわれを動かし、われわれに力を与えるエネルギーを覆い隠している」と。つまり、彼はイメージはリビドーによる情動 (affect) を負わされていると言う代わりに、イメージは動因として、核としてここで活気付けられており、全てのエネルギーはここに集中させられていると言いました。それ (対象 a) はあたかも私たちのイメージを動かす燃料のようなものです。簡単に言えば、対象 a とは、情動にラカンが与えた名前です。これが第一の定義です。しかしラカンは、情動という概念にはとどまりませんでした。確かに対象 a とは私たちのイメージを動かすエネルギーであり、情動であります。彼はそれらを対象 a と呼びました。なぜならそれは名前がないし、それについては知られていないからです。それは真の未知なもの (un véritable inconnu) なのです。フロイトはリビドーとは何であるか知りませんでした。ラカンはわれわれのイメージを動かすエネルギーが何であるか知りませんでした。彼は、われわれのイメージを動かしているものとして、玉ねぎの内部にある芯のようなものを仮定したのです。対象 a という名は、それが何であるか分からないものにラカンがつけた名前なのです。それはちょうど数学で言う知らないものに対する X のようなものです。つまりラカンは対象 a というものが正確に何であるのか、エネルギーとは何であるのか分からなかったのであり、それゆえそれに対象 a という名を与えたのです。

質問者：どうもありがとうございました。

枝川昌雄：しかしフロイトにとっては、「喪 (deuil)」やメランコリーの対象が対象 a なのではなかったでしょうか？

ナシオ：いいえそうではありません。つまり、この「対象 a (objet petit a)」という名は「他者 (autre)」から来ているのであり、abc の a から来ているではありません。

枝川昌雄：私はその対象 a の概念がフロイトの「喪」の概念に対応しているのではないかと言いたいのです。

ナシオ：私は、それは一つの例だと言っているのです。「喪」の対象は対象 a の一つの例です。これはラカンの最後の探究であってこのことには非常に意識的であらねばならないということをおきたいと思います。この対象 a ということについて完璧に説明するために、最後に一つのことを述べておきたいと思います。皆さんにそれはとても込み入っていると私は言いました。ここで二人の人間がいると想像してください。これら全てが自我に無意識を足したものです。そして現実界といったものがありますが、私はまだそれについて説明していません。これら全て、それはイメージの玉ねぎとしての自我、プラス私が今しがた S1 と S2 という二つのシニフィアンで表した無意識、プラス現実界という概念、これら全てを私は「幻想 (fantasme)」と呼びます。これら全てを二人の人間の関係において考えねばなりません。つまりここで確認しておかなければならないのは、ここで私が述べていることはラカン理論の私自身の解釈だということで、もしここに他のラカン主義者がいたなら私の意見に反対なさるかもしれません。私はその人にこう言うでしょう。私がここで述べているのはラカン理論に導くことであって、ラカン自身が言ったことにこうしたことの萌芽は見られるのです。

まとめましょう。自我、無意識、現実界、それらを二人の人間の間に据えなければなりません。つまり、二人の間には幻想があります。注意しなければならないのは、この人というのは誰でもいいというのではなくて個人が「選んだ人 (élu)」だということです。それは愛された誰かであり、父や妻や息子など誰か選ばれた重要な人でなければなりません。その幻想は共通の幻想なのです。

対象 a といったものはこの幻想の中心にあります。皆さんがちゃんと理解しなければならぬのは、対象 a は幻想といった玉ねぎの中心にあるということです。なぜならこの玉ねぎといったものは二人からなっているからです。言い換えれば、対象 a とは二人の関係を動かす心的エネルギーなのです。ラカンの定型表現では「対象 a とは欲望の原因である」となっています。その欲望の原因とは、何の欲望の原因でしょうか？ それは「他者 (autre)」に対する欲望です。我々を他者に執着させる欲望の原因なのです。それは私たちを結びつけ、二人を結びつけ、家族のように私たちのきづなを動かす原因となるものです。

「転移」

これらは私自身のラカン理論の解釈の説明だということをお断りしておきたいのです。他のラカン派の人は違った考えをお持ちかも知れませんが、私たちは近い意見を持っているだろうと思います。私にとってのラカン理論とは、根本的に常に他者との関係を考慮した思想だということになります。なぜならそれは分析家 (analyste) への関係の情熱 (passion) の理論だからです。ラカン理論における関係というものは、常に主体内的 (intra-subjective) なものと考えてはなりません。それは相互主観的 (inter-subjective) なものと考えなくてはなりません。なぜならこの相互主観的な関係といったものは、単に私と私の息子や私の父や娘との関係にとどまらず、患者と分析家との関係をもさすからです。それらの「選ばれた人 (élu)」については私は幾つかの例を挙げましたが、その例の中に私たちが頻繁に考える例があります。それは選ばれた人としての精神分析家です。この場合の幻想は「転移 (le transfert)」と名づけることができます。皆さんお分かりのように異なったやり方で、私は皆さんをゆっくりとおなじみの用語に導いていきます。もし誰かが「ナシオさん、転移といったものは何でしょうか？」と質問しましたなら、私はこう答えるでしょう。「転移とは二つの主体を現前するただ一つの対象、ただ一つの S1、S2 に結びつける幻想だ」と。つまり「転移」というものは二人を結びつける「幻想」であり、二人とも唯一の無意識を持っています。実際、自我というものがありますが、それは二人全てを結び付ける想像界 (l'imaginaire) です。もし仮に、それが「一つの自我 (un moi)」だとしても、私は心の中では常に、他者に動かされているのです。そうでなかったなら、私はイメージを持つことができないでしょう。

もし他者が私を見ないなら、私は私自身のイメージを持たないでしょう。常に鏡の反射が必要なのです。他者は一つの鏡として機能しているのです。したがって患者と分析家との関係とは何かということになれば、それは幻想であり、その幻想が「転移」なのです。まだ少し時間があります。他にご質問ありませんか？

「幻想」の起源

質問者：私はどういうことからその「幻想」というものが生まれるのか知りたいのですが、たとえばストーカーと呼ばれる人がいますが、そういう人達の「幻想」はどういうことから生まれるのでしょうか？

ナシオ：精神分析における「幻想」の基本概念といったものは、次のようなものです。最初、私は皆さんに「幻想」とは内的生活に与えられた名だと言いました。次に私は「幻想」とは、皆さんがそれに気づくことはないのですが、二人の存在をを結び付けるものだという考えに皆さんを導きました。最初私は「幻想」とは私の内部にあると言わざるを得ませんでした。私は皆さんに言いました。「幻想」とは「内的生活」に与えた名であると。その次に私は、「幻想」とは、それと気づかれることなく、二人の人間を結び付けるものだと言いました。つまり私は「幻想」とは私の内部にあるものだということから、私の意見を述べ始めたのですが、次に私はそれを外へ出し、「幻想」とは二人の間に情的なきづながあるという条件のもとで、その二人の人間を結び付けるものだと言いました。私が一緒に「幻想」を持つ最初の人間といったものは、私の母です。それは母であり、父であり、乳母であり、プルーストにとっては叔母であります。そして人生においては、私が成人したときの愛の選択といったときには、子供のときの「幻想」を繰り返すことになるのです。人生において私はある女性を選び、ある男性を選びます。それはどちらでもかまいません。人が情的な選択を行うとき、それはもっと昔の情的な選択の繰り返しであるわけです。私たちの人生といったものは、情的な結びつきの繰り返しです。それはあたかも私たちが同じことを別な風に繰り返すかのようです。例えば、私が精神分析において長椅子に横たわったなら、私は分析家に愛着を抱くでしょう。私は子供のときや青春期や若いときと同じ関係を繰り返すのです。私は他者に愛着を抱くと

きある同じ形式を持つわけです。もし皆さんが自分で情的に選んだ人たちのことをよく考えてみるならば、それがごく近しい友人であろうと、それが情的な相手であろうと、皆さんはその人達はすべて似通っていることが分かるでしょう。それゆえ「幻想」といったものは、最初形作られ、繰り返され、少しずつ変えられますが、同じままなのです。

ところで、私たちもそうなのですが、中にはときおり病んだ「幻想」を持つ人々がおります。(ドアの方に歩いて行き)例えばこれは作り話ですが、私が子供の頃、こんな風にしてドアのところで母親が衣服を脱いでいるところを見たとします。私はそれを気に入り、それに興奮させられます。その「幻想」は、私の中で痕跡をとどめ、結晶化し、石化した何かとして残ります。それは私が25才、あるいは30才になったときに、木の陰から愛し合うカップルを覗き見る窃視症患者となって現れるのです。お分かりでしょうが、これが病的な「幻想」です。このように私は皆さんに、「恋愛妄想 (érotomanie)」のように、時にはより深刻な病気となるような「幻想」の例を説明しました。「恋愛妄想」といってもそれは、私が誰かを大変愛しているといった妄想ではありません。それは他者が私を愛しているという妄想です。それは精神病の重い症例です。それは例えば、マイケル・ジャクソンをテレビで見たグルービーと呼ばれるような熱狂的なファンが、彼は私を愛していると言ったと思うような場合がそれに当たります。あるいは(ある男性が)自分は秘書であり、実際はそうでないのに、社長が自分を愛していると言うような場合、つまり同性愛者のそのような場合があります。他に質問がありませんか？

「幻想」と「恋愛妄想」の違い

保科正章：子供の「幻想」と「恋愛妄想」との関係や違いは厳密に言ってどうなのでしょう？

ナシオ：子供の「幻想」と「恋愛妄想」の関係は、次のようなものです。もし私が、「幻想」を生きているなら、私はためらい、疑いを持ちます。例えば、私が一人の女性を選んだとします。それは私の婚約者です。私は結婚するでしょう。私は自分が結婚するか、しないか知りません。私は神経症です。なぜならそれぞれの決定が少し疑いと結びついているからです。「神経症」の特質は「疑

い」です。「恋愛妄想」においては、主体は確信しています。一瞬たりとも彼は疑いません。神経症者の「幻想」においては主体はその結びつきを疑っています。他方「恋愛妄想」は精神病であり、精神病の特徴は「確実さ (certitude)」です。

別の質問者：ではその精神病の確実さといったものはどうして生まれるのでしょうか？

ナシオ：それは分かりません。それは丁度私たち精神分析家や精神科医にとっては、精神病は「エイズ」や「癌」のようなもので原因は分かりません。ウィルスは知られています。私は仮説を述べているんですが、なぜ人が「恋愛妄想」に陥るのかは分かりません。ええ、父や母や社会的因子などと言う人がいるかも知れませんが、私はそれは分からないと言わねばなりません。ただ私たちは、自分がそれを知らないということを知らねばならないのです。精神分析の理論には人はなぜ、むしろどのようにして精神病になるのかという仮説があります。「排除 (forclusion)」という理論があります。ラカンはそのを推し進めたのですが、フロイトもそれについて本を書いております。しかし結局はなぜなのか私たちは分かりません。他に質問ありますか？

イメージとシニフィアンの違い

質問者：イメージとシニフィアンの違いといったものはどういうものでしょうか？

ナシオ：ありがとうございます。いまイメージとシニフィアンの違いについて質問なさいました。イメージとは何でしょうか？ イメージについて語るとき、人は常に鏡のことを考えます。私は、ほらこれが私の「像」だという風に言います。しかし数学者もまた「写像 (image)」という語を用います。数学者のその語の定義は鏡によるものではありません。数学者の「写像」の定義は次のようなものです。もしここに a と b という対象があります。対象 b というものが a の「写像」です。すべての a の点が b の点に対応しております。「写像」というものは点と点が対応しているものだと言えます。これらの一対一で対応して

いるイメージといったものは、お分かりのように、視覚的であり、聴覚的であり、味覚的であり、嗅覚的であり、触覚的であります。プルーストのマドレーヌはここに位置づけられます。プルーストが25才のときだとしましょう、彼のマドレーヌの味は5才のときのマドレーヌの味と一対一で対応しています。それがイメージです。ところでこれらには対応しない部分があります。イメージは人間の精神生活においては完全ではありません。つまりプルーストが25才で食べたマドレーヌの味は5才のときに食べたそれと殆ど同じですが、厳密には全く同じではありません。マドレーヌの「甘い味」といった視点では、それはイメージです。なぜなら対応関係があるからです。等しいもの、それはイメージであると言うことができるでしょう。

ある時期と別の時期で等しくないもの、それがシニフィアンだと言えるでしょう。つまりシニフィアンとは違った風にだが繰り返されるものなのです。繰り返され、ああ同じ味だと感じられる部分、それがイメージです。それは同じだが完全に同じだというわけではなく、なぜなら25才である私はもっと年をとっており、もっと懐かしく感じられるから、それは違っている、それがシニフィアンなのです。味わうという「快楽(plaisir)」、それが対象aです。等しいもの、対応するもの、同じものという三つのものがあります。それがイメージです。そして違うものそれがシニフィアンであり、「味」の中で定義不可能なもの、それは心的エネルギーであり、それが対象aなのです。人生は移り行き人は同じ人間ではありえません。その違いそれがシニフィアンです。そしてものの味、マドレーヌを味わう「快楽(plaisir)」、それは同じものが残っているのであり、それが対象aの一つの現れ (figure)である情動です。それゆえ私は「穴(trou)」と呼ぶのです。なぜなら「快楽」といったものは対応物を持たないからです。「快楽」といったものは定義不可能であり、それは等しいとは言えません。それは異なったものです。私は次のように言うことができます。味といったもの、それには情動があります。それは表象を持たないものであり、情動1とか情動2と言えますがそれらは同じもので定義できないものです。(ここで保科正章氏による補足説明があり、以下は氏の説明の要約である(訳者)：イメージというものは5才と25才に現れてくる同じものであり、シニフィアンの次元になるとそれは違いとして現れてきます。このイメージの例でも分かるように、定義できない「快楽 (plaisir)」の次元があって、そこに対象aという

ものが置かれるのです。イメージが繰り返されてもなぜ嬉しいのか、シニフィアンの反復がなぜ嬉しいのかそういうエネルギーとしてのさっきから言っている「快樂」の源泉としての対象aがあるということです。）これがイメージとシニフィアンの違いです。イメージというものは常に対応であり、シニフィアンというのは差異と反復なのです。

注

1 本稿は、1996年12月24日、大谷大学において行われたJ=D・ナシオ（Juan-David Nasio）博士による“La psychanalyse en France d'aujourd'hui—La place de Jacques Lacan dans la culture française—”と題する公開セミナーの録音テープを翻訳したものである。1942年にアルゼンチンで生まれたナシオ博士は、精神科医の資格取得の後、クライン派の精神分析家となる。渡仏しラカンの弟子となり彼のセミナーをまかされることもあるほどになる。現在は「バリ精神分析セミナー」を主催すると同時に自分の診療所で治療を続けている。またパリ第7大学でも教鞭をとっている。

今回のセミナーは即興的に語られるため、大谷大学のディディエ・ヴェステル助教授と出席者である精神科医、保科正章先生に通訳の不備な個所を補っていただいた。お礼申し上げます。また、このセミナーを録音したカセットをくださった神戸大学の枝川昌雄教授にもお礼申し上げます。

2 ナシオ博士の来日は青山学院大学の招きで実現したが、京都に滞在するにあたっては、京都大学の新宮一成助教授と彼の研究室の学生の皆さんにも大変お世話になったことを感謝したい。

3 実際は、1924年にブルトンが発行した『シュールレアリスム宣言』で、「シュールレアリスム」と「シュールレアリスト」という語は使用されている。